

W.シン版『チョーサー全集』(1532年) にみるテキスト領有*

—— ヘンリソンの『クレシドの遺言』挿入と本文改稿 ——

向井 毅、柴倉(田村)水幸、國崎 倫
川端 新、山口裕美、都地沙央里

1. はじめに

本稿は、ロバート・ヘンリソン (Robert Henryson) の『クレシドの遺言』(*The Testament of Cresseid*) がウィリアム・シン (William Thynne) により『チョーサー全集』(*The Workes of Geffray Chaucer*) (1532年) に収録されるにあたり、いかなる本文改変がなされ、どのような経緯からジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) の『トロイラスとクリセイダ』(*Troilus and Creseyde*) と『善女列伝』(*The Legende of Good Women*) の間に挿入されたのかを明らかにすることを目的とする¹。

2. 作品出版史

本作品は、当初チョーサーによって執筆されたと考えられていた。それは、スコットランド方言で書かれた本作品にシンが大幅に手をくわえ、1532年出版の『チョーサー全集』に収録したことに端をはっする。彼は全集の『トロイラスとクリセイダ』の直後に本作品を挿入しており²、本文記述の中にチョーサー賛辞と詩人の『トロイラスとクリセイダ』への言及があるにもかかわらず³、読者はクレシダ⁴の最後を描いたチョーサー自身の作品として受け入れたと思われる。この全集はその後増刷され、また後の印刷者、編集者による改訂がくわえられ、1721年のアリー (John Urry) 以前に少なくとも8回出版されているが、そのすべてに本作品が収録されている⁵。その結果、ア

リーが収録した本作品の冒頭に述べているように、長くチョーサーの『トロイラスとクリセイダ』の第6巻として親しまれてきた⁶。彼は続けて、著者は“*Mr Robert Henderson*” (*sic*) であると記し⁷、これがイングランドの印刷物における初めての著者特定となった。スコットランドでは、すでに『クレシドの遺言』はヘンリソンの著作物と認められており、ヘンリー・チャーターズ (Henrie Charteris) によりエディンバラで出版された刊本 (1593年) のタイトルページには、すでに“*M. Robert Henrysone*”の作者名が記され⁸、同じくエディンバラで1663年頃に出版されたアンドリュー・アンダソン (Andrew Anderson) の版においても“*Master Robert Henrison*”の名が明記されている⁹。

3. シンによる言語的改編

スコットランド方言で執筆されたヘンリソンの『クレシドの遺言』を編者シンが『チョーサー全集』に採録するためには、チョーサー的な言語的特徴をテキストにあたえ、かつロンドンを中心とする中南部の読者の言語使用に配慮した編集が必要であったことは想像に難くない。事実、文法、語彙、綴りにわたる言語上の変更がテキスト全体に観察される。ここでは、特に語彙と文法的側面におけるテキスト改変に焦点をあて、そこから読みとれるシンの編集上の特徴を明らかにしてみたい。

ヘンリソンは15世紀から16世紀にかけて活躍した、いわゆる「スコットランドのチョーサー派」の一人と考えられ、『クレシドの遺言』には全編をとおして当時のスコットランド方言が用いられている。本作品の言語を特徴づけ、後期中英語期のスコットランド方言に顕著な言語的特徴として、一般に次のような事項が挙げられる¹⁰。

(1) 綴り

<i>quh-</i>	(whに相当)	例： <i>quhilk</i> WHICH, <i>quhen</i> WHEN
<i>ch</i>	(ghに相当)	例： <i>nicht</i> MIGHT, <i>richt</i> RIGHT
<i>sch</i>	(shに相当)	例： <i>scho</i> SHE
<i>a</i>	(oに相当)	例： <i>twa</i> TWO, <i>sa</i> SO
<i>ai</i>	(o/aに相当)	例： <i>maist</i> MOST, <i>hait</i> HOT

au (o に相当) 例: *auld* OLD
ei (ea などに相当) 例: *greit* GREAT
ui (oo に相当) 例: *buik* BOOK

(2) 動詞の屈折語尾

弱変化動詞過去形・過去分詞: *-it/-yt* (-ed に相当)

現在分詞: *-and* (-ing に相当)

3人称単数現在形: *-es/-is* (-eth に相当)

複数現在形: *-es/-is* (-e(n)に相当)

ここに掲げたスコットランド方言の綴り字上の特徴は、後述の押韻箇所や変更のやり残しを除けば、シン版ではチョーサーが用いた中南部あるいは南東部方言の一般的な形態に改めている。はたして語彙や文法上の方言をシンはどのように扱ったのか、具体例を挙げながら検討してみたい。

3.1 過去形・過去分詞形語尾 “-it”

ヘンリソンは弱変化動詞の過去・過去分詞の活用語尾に、ほとんどの場合“-it”を用いている。シンは確認される113例の“-it”のうち92例をチョーサーが用いた“-ed”に変えている。変更されていない21例中9例は、シン版において該当箇所が削除されている。また、4例は過去分詞から形容詞に置きかえている。

For I traistit that Venus, luifis queen, (H. 4: 22. 強調筆者。以下同じ。)

For I trusted that Venus loves queen (Th. 4)

I say this by yone wretchit, Cresseid, (H. 40: 275)

I saye this by yonder wretche Creseyde (Th. 40)

3.2 3人称単数現在の語尾 “-es/-is”

ヘンリソンでは3人称単数現在の語尾として、通常、“-es/-is”が用いられている。シン版は24例中20例を、次の例のように、“-es/-is”から“-eth”に改めている。

Be war thairfoir, approchis near your hour; (H. 65: 456)

Beware therefore approcheth nere your hour (Th. 65)

3例は該当箇所が削除されており、「クレシドの嘆き」(The Complaint of Cresseid)に現れる1例だけが変更されずに語形“-is”のままである。チョーサーは韻を整えるために時には方言形を使用したか、同様にシン版もここでは押韻を優先して、北方方言の“-es”を残している。

My spereit I leif to Diane, quhair scho dwellis,

To walk with hir in waist woddis and wellis. (H. 82: 587-88)

My spirite I leaue to Dinae wher she dwelles

To walke with her in waste wodes & welles (Th. 82)

3.3 現在分詞“-and”

ヘンリソンは現在分詞の語尾として“-ing”と“-and”を併用している。“-ing”の使用は23例、“-and”は14例であるが、このうちシン版は14例の“-and”のうち、11例を下記に見るとおり“-ing”に書きかえて、中南部あるいは南東部方言の標準語形に改めている。残り3例はいずれも該当箇所が削除されている。

Cupide the king ringand ane silver bell, (H. 21: 144)

Cupide the kyng ryngyng a syluer bel (Th. 21)

3.4 語彙の変更

文法と同様に、スコットランド方言の語彙を、シン版は南部地方の一般的な語に置きかえる傾向が観察される。たとえば、スコットランド方言で“people”の意の“leid” (H. 63: 449, 451) は、それぞれ“people” (Th. 63) と“folke” (Th. 63) に変更されている¹⁾。他にも、kirk (H. 17: 117) を‘churche’ (Th. 17) に、“schoklis” (=‘icicles’) (H. 23: 160) は“yckels” (Th. 23) に、“baid” (=‘abode’) (H. 68: 490) は“stode” (Th. 68) に、“ochane” (=‘lamentation’) (H. 76: 541) は使用を避け、意味の異なる“atone” (=

‘together’) (Th. 76) に、2 例ある “deid” (=‘death’) (H. 10: 70; 82: 585) のうち、前者 (quhat deid=‘what death’) の名詞句は動詞句 (she deyde) に、後者は標準形 “dethe” (Th. 82) にそれぞれ変更されている。ただし、標準形で言うところの助動詞 “gan” (=‘did’) の意味で用いられる北方語彙の “can”¹²⁾については、ヘンリソンの使用例14回¹³⁾のうち、シン版において “gan” に変更されているのは3例 (158, 496, 520) のみである。さらに、“can” を3人称単数過去形の “couth” に書きかえている例が1例 (526) 見られる。また、“couth” の「誤った形」とされる “culd”¹⁴⁾が5例 (252, 348, 360, 370, 512) 見出されるが、いずれも “couth” に書きかえられており、“gan” への変更は試みられていない。ヘンリソン本文に現れる “can” のとり扱いを総合すれば、中南部や南東部の標準形に書きかえるという一貫した姿勢が見られない。それは次の引用に観察されるように、同じスタンザ内で隣接使用された “can” に対し、さまざまな対応を行っていることから理解できる。

For knichtlie pietie and memoriall
Of fair Cresseid, ane gyrdill can he tak, can] Th. gan
Ane purs of gold, and mony gay jowall,
And in the skirt of Cresseid down can swak; can] Th. can
Than raid away and not ane word he spak,
Pensiwe in hart, quhill he come to the toun,
And for greit cair oft syis almaist fell down.

The lipper folk to Cresseid than can draw can] Th. couth
To se the equall distributioun
Of the almous, bot quhen the gold thay saw,
Ilk ane to uther preweliu can roun, can] Th. can
And said, “yone lord hes mair affectioun,
How ever it be, unto yone lazarous
Than to us all; we know be his almous.”
(Henryson, 72-73: 519-32)

これは上述の“leid”などの語彙の改変例とは異なり、“can”を用いたままでも読者の理解が可能と判断したためか、あるいはチョーサー自身も執筆当時この迂言用法の“can”を使用していた、との誤った推測がシンに働いたのであろうか。

3.5 韻律と方言の改変

『クレシドの遺言』は全86のスタンザで構成され、このうちの1連9行の詩形を持つ「クレシドの嘆き」の7連からなる挿入部を除けば、チョーサーの『鳥たちの議会』(*The Parliament of Fowls*)と同様に1連7行のライム・ロイアルを採用しており、ababbccの脚韻を踏み、1行10音節で構成されている。シン版には韻律を意識して本文を改編する特質がみられる。例えば、第20連では、bの脚韻“goddess”、“face”、“grace”(H. 20: 135, 137, 138)は、Th版では“goddace”、“face”、“grace”に改められるが、ヘンリソンの[e:s]をチョーサー時代の[a:sə]に脚韻音を移した上で、綴りの統一を行っている。また第23連では、bの押韻で“chin”、“rin”、“thin”(H. 23: 156, 158, 159)と脚韻を踏んでいるが、“rin”は“run”のスコットランド方言形であり、音と綴りの両面で脚韻を踏むように北方方言の“ryn”を残している。また、第76連では、bの押韻で“ochane”、“wane”(H. 76: 541, 543)と脚韻を踏んではいるが、OEDによれば“ochane”は「嘆き」を意味するスコットランド方言語彙であり、読者に不明と思われる“ochane”を意味の異なる“atone”(=‘together’「一緒に、同時に」)に変えた上で、押韻の対となる“wane”(悲しみ)を“one”(one<wone「住み処」)に置き換えて文脈に矛盾のない読みを作りだし、かつ脚韻を守っている¹⁵。

3.6 その他の変更

シンによるテキストの変更箇所を観察していくと、編集の手は方言形以外にも向けられていることがわかる。文法面では、if節内の動詞が直説法から仮定法に書き換えられている箇所が1例、before節内で仮定法が法助動詞を用いた迂言形に書き換えられている箇所が1例ある。

“Gif scho in hart was wa aneuch, God wait!” (H. 50: 350)

If she in were wo / I ne wyte god wate (Th. 50)

Than fel in swoun full oft or ever scho fane, (H. 76: 544)

Than fel in swoun ful ofte or she wolde fone (Th. 76)

語彙面においても、当時の読者のために読みやすさに配慮したと考えられる書き換えが行われている。“fenyteit”¹⁶(H. 10: 66)は“forged”(作る)(Th. 10)に、“air and lait”(H. 12: 82)は“early and late”(夜が明けても暮れても)(Th. 12)に、“burelie”(H. 62: 438)は、“goodly”(素晴らしい)(Th. 62)にそれぞれ変更されている。また、次に挙げる例は“thoillit”(苦しむ)という、スコットランド方言の語彙を“she was in”のように、ことばを補ったうえ、後半の“and quhat deid”の部分“or she deyde”のように、or(‘before’)節に変えることによって、理解が容易になるように書き換えている。

And quhat distress scho thoillit, and quhat deid. (H. 10: 70)

(彼女がいかなる苦しみと死を迎えたかということを)

And what distresse she was in or she deyde (Th. 10)

(彼女が絶命する前に、いかなる苦しみに身を置いていたかを)

これまで観察してきたとおり、シンによる文法面と語彙面での変更の特徴として、明らかなスコットランド方言を、チョーサー作品を享受するであろう読者層に一般的な用法や語彙に変更したり、読者にとってより理解しやすいように同じ意味の語に書きかえたり、文構造にも手を加える、といった点があげられる。くわえて、チョーサー風の語法を採用したとも考えられる項目が2点挙げられる。第一に、否定語“nor”(H. 59: 415; 66: 473)を“ne”に変えている例が2例。第二に、“mony”(H. 72: 517; 73: 521; 76: 541)を“many a”に変えている例が3例ある。

スキートはシンの改編にたいして、「読者の理解を考えて、スコットランド方言を南部方言に変更している箇所があるが、無謀な変更でありそのままにしておくべきだった」¹⁷と辛らつな評価をした。確かに、語彙を変更することで意味が不明になっている箇所¹⁸や、詩行の削除¹⁹も見られる。しかし、文法と語彙の上でのシンによる変更を観察すると、方言形や比較的一般的で

はない形を中南部の標準的な形に改編したり、文構造や品詞を変えたりすることで、理解を容易にするような編集を行っている。読者にとって受け入れやすい作品にすることがシンの意識にあったことは、スキートも認めることである²⁰。なお、すでに述べたとおり、『クレシドの遺言』は当時の読者にチョーサー作品として受容されていた。この作品を『トロイラスとクリセイダ』の直後に配置した、作品の物理的コンテキストだけでなく、シンによる言語上の変更もチョーサー自身の手になる作品として受容された要因の一端を担っている。

4. 作品挿入とその意図

チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』は、クレシダの裏切りを知ったトロイラスがディオメーデに復讐するために戦場を駆けまわるものの、アキレスによって討たれるという最期をたどる。しかしクレシダのその後については、なんら語られることなく話は終わる。ヘンリソンは、このクレシダの末路に着目し『クレシドの遺言』を執筆した²¹。ヘンリソンのクレシダは後にディオメーデにうち捨てられ、娼婦にまで身を堕し、みずからの行いを棚にあげ、愛の女神ヴィーナスとその息子キューピッドをののしる。そのために、天上の神サトルヌスの呪いを受け、容貌も衰えたうえに、癲病を患ってしまう。彼女は同じ病気仲間たちと物乞いをしながら暮らしている。そのおりトロイラスと出会うも、知られることなく亡くなる²²。チョーサーの作品にはクレシダのその後の人生が記されていないため、彼女の罪は読者（聴衆）の前に問い立てられることはない。作中の語り手は次のように述べる。「クリセイダはかのテュディウスの息子を愛することになったし、トロイラスは、沈痛な苦悶のうちに泣かなければなりません。この世での誰が見られるにせよ、これがこの世の姿なのです(*Troilus and Criseyde*, V, 1746-48)²³。」二人のような恋愛はこの世の中に往々にして起こることであり、クレシダの裏切りは世の習いであるとの理解を示す。チョーサーの関心は、女性（クレシダ）の裏切りをとおして人間的成長をはたしたトロイラスが、第八天から下界を見おろし、地上でくり返される営みの空しさを悟り、現世蔑視の思想を語ることにあった。他方、ヘンリソンは、クレシダの末路を描いてしまったこと、彼女の墮落と傲慢さを強調してしまったことで、彼女の行為の応報

が白日のもとにさらされ、読者のクレシダに対する評判をさらに貶めてしまったことは否めない。

1532年シン版『チョーサー全集』において、ヘンリソンが描くこのクレシダの墮落譚が『トロイラスとクリセイダ』と『善女列伝』の間に強制的に挿入され、チョーサーの著作であるように偽装された。すでに両作品の印刷を済ませた段階で、チョーサーの正典ではないと知りながら後知恵として『クレシドの遺言』の挿入を思いついた。ヘンリソンが用いた“Cresseid”の綴りをチョーサーが用いた“Creseyde”²⁴に改めることに始まり、本文に種々の編集を施し、当該折丁の紙葉を増やし、変則的にフォリオ番号を付さずにテキストを挿入しなければならない²⁵。そこに強い動機が働いていたことは否定できない。その意図を探るうえで、チョーサーが『トロイラスとクリセイダ』第5巻において語り手に述べさせる次の言葉は注目にあたいする。

別の書物でも、彼女の罪は御覧になれるのですから。

私としては、皆様方がお望みならば、もっと喜んで、
ペネローペの貞節やアルセスティスを書く積りです。

(*Troilus and Criseyde*, V, 1776-78)²⁶

この語りは「別の書物でも、彼女の罪は御覧になれるのですから。」と読者に伝えている。すなわち、挿入の一つの動機として、ヘンリソンのクレシダを後ろに配置することで、チョーサーが『トロイラスとクリセイダ』で語る彼女の物語を補完することが可能になったと考えられる。また、『トロイラスとクリセイダ』の語りは読者が望めば、貞女の代表である『オデュッセイア』(*Odysseia*)のペネローペやギリシャ神話のアルセスティスについて書く用意があるとも明言している。このことから、シン版『チョーサー全集』において、『トロイラスとクリセイダ』の後に『クレシドの遺言』と『善女列伝』が配置されているのは、チョーサーの語り手の文脈に沿うことになる。

今一つの動機として、女性性をめぐる像の対照的配置が想定される。チョーサーは、先にも述べたとおり、クレシダの罪ゆえに彼女に何が起こったのかを書き継ぐことはなかった。一方、ヘンリソンは、チョーサーに描かれなかったクレシダの罪とその末路を取りあげ、クレシダが悪女であるという確信を読者に与えた。『善女列伝』はリチャード二世の妻アンに乞われて書かれた

ものであるとされている。すなわちこの作品は貞女の一群を描くことで、女性性の美質とその歴史的事実を確認し、それを受け継ぐ女性教育を作品意図の一つとしている。このような意味で、『クレシダの遺言』のクレシダと『善女列伝』の女性たちは、テキストの配列上、それぞれ「悪女」と「貞女」を表象する代表的人物像を担うこととなる。こうした対照的な女性像をより明白に表現するために、シン版は意図的にヘンリソンよりもクレシダに悪女としての振るまいをあたえようと、内容面でも編集の手を加えたと想像できる。

シン版の『トロイラスとクリセイダ』は、物語の結句（エクスプリキット）に「こうしてトロイラスの最終巻である第5巻は終わる。そしてここに美しいクリセイダの痛ましく苦しい遺言が続く。」²⁷ とのつなぎ言葉を置いている。クレシダに哀れな結末が訪れることを示唆し、男性トロイラスのボエティウス風哲学的な悟りとは対照的に、「不実な女性と誠実な男性」²⁸ という女性クレシダの悟りを後に控えさせる。クレシダ像の改変については以下に詳述するが、男女の日常の営みのなかに目撃された悪女クレシダの姿は、『善女列伝』のテキストに写る女性の「鏡」に照らし返されて、彼女の所作やことばの一つ一つが当時の女性たちへの教訓・警句として働くことになる。個々の作品を単独で受容する場合とは異なり、全集というコンテキストにおいて読まれるとき、それぞれの作品に内包される意味がより鮮やかに、あるいは副次的で隠れた意味が躍り出て、特別な陰影を帯びて現出してくる。

5. 描き直されるクレシダ

ヘンリソンの作品にはクレシダの心や魂の内が描きだされている²⁹。短いながらも悲劇を描いた傑作であるとの評価がある。一方、シン版では、ヘンリソン版に比べ、傲慢なクレシダの姿が顕著となり、彼女の最期からは悲劇性が後景化していると思われる。こうした読みを促す具体例を確認してみよう。

例えば “Me and my mother starklie can reprove” (H. 40: 280) 「(クレシダは) 私 (キューピッド) と母 (ヴィーナス) を激しく非難した」は、シン版において “Me and my mother she stately can reprove” 「(クリセイダは) 私と母を高慢にも非難した」に修正されている。文脈から主語が推測できる

ものの、読みやすいようにとの配慮からであろう、主語 “she” (=クリセイダ) を立て直し、強意副詞 “starklie” 「強く・激しく」から評価副詞 “stately” 「堂々と・高慢に・威張って」へと改変することにより、感情の強さを伝える描写から、自らの非を認めないクレシダの傲慢な態度を表す結果になっている。シン版はヘンリソンが描いたクレシダ像に否定的な印象をさらに増幅させたと言える。また、“wantones” (H. 46: 319) 「快活さ」と記される箇所が、シン版では “thy wantonesse” となり、シンは “thy” (=クリセイダ) の付加により、“moisture” (H. 46: 318)、“heit” (H. 46: 318)、“pomp” (H. 46: 320)、“riches” (H. 46: 320) と同時に、人間として生きる上での基本的喜びを剥奪される人物が、他でもなくクレシダであることを明記している。他にも、不特定多数を対象とする描写を、クレシダ個人に的を絞る描写が挙げられる。“thair” (H. 69: 495) がシン版では “her” へと変更される。“thair” はトロイラス一行を待ち受ける癲病人たちを指し示すが、シンが “her” としたことにより、「癲病人たちの」物乞いから「クレシダの」物乞いへと描写が移され、クレシダ個人に視点が絞られることとなる。ヘンリソン版において語りの視点が「トロイラス対癲病人たち」という大まかな構図であったものが、シン版では「トロイラス対クレシダ」の個人同士の関係に変えられている。

また、シン版はヘンリソンに比べ、クレシダの傲慢さが問われている。その結果としての彼女の孤独が強調され、クレシダは惨めな人物として読者の前に現れてくる。“but fellowschip on fute” (H. 14: 94) 「歩いて供をする仲間はおらず」は、シン版では “without felowship or refute” (“or refute” 「仲間もまた頼る人もなく」) へ変更され、クレシダの孤独がいっそう強調される。また、同じ連においてヘンリソンが “Disgaysit” (H. 14: 95) 「変装して」と描写したものを、シンは “Dissheuelde” 「髪を振り乱して」に改めたことにより、クレシダから冷静さを失わせ、自尊心を奪い取る結果になっている。シン版はクレシダに変装する余裕をあたえず、彼女から品位と誇りを奪い、美をつくろう余裕も許さない、惨めな姿へと変更した。美しさを誇りとする彼女にとっては屈辱的なまでの描写であろう。“aneuch” (=‘enough’) (H. 16: 110) 「胸に大きな悲しみを抱いて」 “with bail aneuch in breast” は、シン版では “enewd” (=‘anewed’) 「胸に悲しみも新たに沸き起こり」 “with bale enewed in brest” へと変えられ、クレシダはくり返し訪

れる悲しみにうちのめされる。

シンがヘンリソンのテキストを改稿する目的の一つに、すでに論じた悪女の典型としてクレシダを表現することがあった。シン版『クレシドの遺言』においては、善女との差異化をより図るために、クレシダの惨めさをいっそう強調することが必要であった。“Be war in tyme, approchis neir the end” (H. 64: 456) 「時をおかずお気づきになることです。最期が近づいています。」はシン版では “Beware therfore approches nere your ende” (Th. 64) 「それゆえにお気づきなさい。あなた方（読者である女性たち）の最期が近づいています。」へと書き換えられ、第64連の最後の行へと移される。“your” としたのは、クレシダ個人の行いとその応報が読者にも同様に訪れる可能性を示唆している。シン版に見られる第64連の詩行の移動は、第65連と合わせて対句として二重に警句を置こうとしたためであり、そのためにヘンリソン版第65連の最後の行（469）“Fortoun is fikkill quhen scho beginnis and steiris” 「運命の女神は動き出せば気まぐれになる。」は省略される。さらに、“Beir in your mynd this schort conclusioun” (H. 86: 614) 「この手短に語った結末を心にとめて下さい。」の “schort” は、シン版では評価形容辞 “sore” （悲惨な）に改められ、クレシダの行状とそれに伴う悲惨な必然を読者の読後感として先取り操作している。

6. 変更されるクレシダの言葉

シン版の特徴として、字句の改稿にくわえ、詩行の配列替えと削除を指摘しなければならない。それは、『クレシドの遺言』に挟みこまれた「クレシドの嘆き」において表出される、クレシダの言葉のなかで生じている。1連が9行で構成され、全7連（第59連から第65連）でなりたつクレシダの嘆きは、1連7行の他の語りの部分から、詩行配列の形態上、その違いが際だって見える。一見して、シン版「クレシドの嘆き」の詩行が崩れているのがわかる。乱れているのは、第62から65連である³⁰。シンが印刷原稿を編集する際に用いた参照写本自体が不完全で、本文に乱れがあった可能性がある。しかし以下に論じる事例から、詩行の削除や配列替えはシンの本文編集の結果であると解釈することもまた可能であろう。

例えば、第62連。

「あなたの勝ち誇るような名声と高い名誉、
それゆえにあなたはこの世の人の華とうたわれた。
そのすべてが朽ち果て、運命が一転した。
あなたの高い地位は残酷な暗闇の中で一転した。
.....」³¹（H. 434-37）

「勝ち誇るような名声と高い名誉」、「高い地位」などの言葉でクレシダが自身の過去の栄光を確認し、その栄華が運命に翻弄されたことをふり返る。シン版ではこの4行すべてが完全に欠落している。また、第63連においても次の下線部が省略されている。

「私の澄んだ声、優雅な歌声は、
淑女たちと一緒によく歌ったものでしたが、
ミヤマガラスのような耳障りで、おぞましいしわがれ声になった。
他の誰をも凌ぐ私の優雅な振るまい
最も美しいと思われていた私。
.....」³²（H. 443-47）

誰もが認める美しさ、優雅な振るまい、婦人たちとの交友などの回顧も省かれている。彼女の転落を思うとき、これらの美質は累加されて、読者に同情と哀れみの情を募らせかねない。悪女の典型例として語るには不要と判断したのであろうか。

さらに、第64連の下線部もまた省かれている。

「トロイとギリシアの淑女の皆さん、心にお留めください、
誰も理解できないほどの私の不幸、
私の気まぐれな運命、私の不幸、
私の災難を。誰も元に戻すことはできないのです。
.....」³³（H. 452-55）

想像を絶する不幸の身を訴える悲痛の表現であるが、彼女のこの言葉には哀れみや同情を誘おうとするクレシダの心情を読むことも可能である。こうし

た削除箇所には、彼女の栄光や名誉への言及を手控え、クレシダに対する同情を控えさせるねらいがあるとも言えよう。アリストテレスの『詩学』(*The Poetics*)によれば、高貴な人物が不可抗力によって転落する様は悲劇として容認されるが、シン版は、クレシダの運命を悲劇と捉える心の動きを抑え、個人の猥らさが招いた必然の結末という読みを誘導するテキストとなったと見ることができる。シン版のクレシダが表出する嘆きの訴えは、同情と哀れみが読者の心に生起するのを抑制し、同性読者に教訓を汲みとらせることに主眼がある。第64連の最終行は“Beware therefore approaches nere your ende”「それゆえにお気づきなさい。あなた方の最期が近づいています。」が、そして第65連の最終行には、“Beware therefore approacheth nere your hour”「最後の時」に差し替えた、“Beware therefore approacheth nere your hour”「それゆえにお気づきなさい。あなた方の最期の時が近づいています。」が、それぞれ置かれている。行の配列を変え、対句にしたこの修辭的表現には、明らかにシンの意図が隠れている。全7連にわたるクレシダの嘆きの言説では、クレシダは<墮落する悪女>の教訓メタファーと化し、人間クレシダから悲劇性が弱められている。

7. まとめ

トロイラスとクレシダの恋愛の話は12世紀の初めに生まれた。プリギア人ダレスが著した『トロイ滅亡史』(*De excidio Troiae historia*)とクレタ島のディクトゥスの『トロイ戦争史』(*Ephemeris belli Troiani*)のクロニクルをもとに、ブノア・ドゥ・サント＝モールが抒情詩『トロイ物語』(*Le Roman de Troie*)をまとめ、それをヘンリー2世の王妃エレアノールに献呈した。トロイラスとクレシダの話の淵源である。13世紀の終わりには、グィード・デルレ・コロネによりフランス語からラテン語へ訳された『トロイ落城史』(*Historia destructionis Troiar*)がボッカチオの目にとまり、1336年頃『恋のとりこ』(*Il Filostrato*)として書き改めた。英国中世の詩人チョーサーは、この『恋のとりこ』を題材として『トロイラスとクリセイダ』を完成させたのである³⁴。

ここに論じたヘンリソンの『クレシダの遺言』は、チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』の続編として位置づけられるが、大きくはこのような水

脈のなかで編みだされ、先行テキストを背景に受容された。ヘンリソンが試みたトロイラス物語への接近は、チョーサーが取りあげなかったクレシダの悪女としての悲惨な最期である。旧訳聖書のイヴの系譜を引く、女性の姿を描いたと言える。ウィリアム・キャクストン(William Caxton)の継承者であるウィンキン・ドウ・ウォード(Wynkyn de Worde)は、師の『トロイラスとクリセイダ』を再版(1517年)するにあたり、エピローグのなかで騙された男の例としてアリストテレスやヴェルギリウス、サムソンを引きあいに出しながら、「この世に誠実な女性は一人としていない」との読後感を添えた³⁵。チョーサーが第5巻のパリノードに示した作品の意図をずらし(あるいは理解できず)、男性を危うくさせる女性、猥らで移ろいやすい女性性を中心に行った解釈である。しかしこの読みは活字に固定されることで、一人の読者反応が正当で権威ある解釈の地位を獲得する。こうしたドウ・ウォードに類似の解釈を持って創作に向かったのが、スコットランドのヘンリソンということになる。そしてこのテキストがロンドンの地に移しかえられる際に、本文に編集をほどこされた上で、チョーサー自身の作品として『トロイラスとクリセイダ』と『善女列伝』の間に挿入された。作品の並びの構造上、『トロイラスとクリセイダ』の解釈はドウ・ウォードに代表される読みにも必然的に影響をうける。シンが全力を傾注した『チョーサー全集』はヘンリー8世に献呈され欽定本となったが、シンの「領有」行為により、ヘンリソンの作品とそのテキストから誘導される読みも時代の公式の読みとなったのである。

(2010年10月15日受理)

註

* 2010年度前期開講の大学院博士前期課程の授業「英語学特殊研究ⅠB」において、前年度のチョーサーのトロイラス物語に引き続き、ロバート・ヘンリソンの『クレシダの遺言』を取りあげた。本稿はその授業に参加した者による研究成果の一つである。執筆者の所属は次のとおりである。向井毅(福岡女子大学教授)、柴倉水幸(福岡女子大学非常勤講師)、國崎倫(福岡女子大学大学院博士後期課程3年)、川端新(福岡女子大学大学院博士後期課程2年)、山口裕美(北九州市立大学大学院博士後期課程2年)、都地沙央里(福岡女子大学大学院博士前期課程1年)。

1 本文を比較するにあたり、ヘンリソンの『クレシダの遺言』には、Stephen A. Barney,

- ed. *Troilus and Criseyde: Geoffrey Chaucer* (New York: W.W. Norton & Company, 2006) を、シン版ヘンリソンに対しては、Walter W. Skeat's facsimile of the William Thynne's 1532 edition of *The Workes of Geffray Chaucer* (London: Oxford University Press, 1905) を、それぞれ使用した。なお本研究は、先行研究において、両版の本文比較にもとづく分析と解釈がなされていないことをふまえ、校合作業の徹底とその分析に限定した。限られた時間内で遂行したことから、先行する研究について十分な調査を行うことができず、本稿の分析を先行研究に位置づけることができなかった。
- 2 シン版で本作品は、折丁記号 Qq3、フォリオ番号 ccxix (219) で始まる。作品はその後に続く3葉 (Qq4-6) に収録され、それに続き『善女列伝』のテキストが始まる (Qq7)。しかし、Qq7のフォリオ番号は ccxx (220) であり、クレシダの顛末を語る Qq4-6はフォリオ番号に数えられてはいない (Skeat's facsimile edition of the 1532 Thynne, p. xxxi を参照)。つまり、本作品の収録はもともと編纂当初に意図されていたものではなく、後から挿入されたと考えられる。元来の作品配列では、フォリオ番号 ccxix (219) には、『善女列伝』の標題が予定されていたはずである。この議論については、*The Poems of Robert Henryson*, ed. Denton Fox (Oxford: Clarendon, 1981), pp. xciv-xcv を参照。
 - 3 作品中に、チョーサー賛辞及び詩人の『トロイラスとクリセイダ』への言及が三度ある (H. 6: 40-41; 9: 58; 10: 64)。作者ヘンリソンがチョーサーの『トロイラスとクリセイダ』に親しんでおり、それが本作品を書く動機づけになったことが記されている。本作品がチョーサーの手によるものでないことは明白である (Walter W. Skeat's facsimile edition of the 1532 Thynne, p. xxxi)。
 - 4 本稿における女性主人公名は、各作品の標題名および本文からの訳出箇所を除き、統一して「クレシダ」と表記する。
 - 5 1542年、印刷者 John Reynes による増刷、その後 William Bonham, R. Kele, T. Petit, R. Toye らによる版 (1545-50年頃)、1561年印刷者 John Kyngston による Stow 版、そして Thomas Speght が1598年に第一版、1602年に第二版を出版、そして John Urry によって Urry 版が1721年に彼の死後に出版された。Skeat's facsimile edition of the 1532 Thynne, p. xv および Fox, ed. *The Poems*, p. xcvi を参照。
 - 6 John Urry, ed. *THE WORKS OF GEOFFREY CHAUCER* (London: Bernard Lintot, 1721), p. 333. "[...] which [i.e. *The Testament of Crisseid*] might pass for the sixth Book of this Story, [...]"
 - 7 Urry's Edition, p. 333.
 - 8 Henrie Charteris, ed. *The Testament of CRESSEID*. 1593. STC 13165.
 - 9 Andrew Anderson, ed. *THE TESTAMENT OF CRESSEID*. 1663.
 - 10 *Troilus and Criseyde: Geoffrey Chaucer*, ed. Stephen A. Barney (New York: W.W. Norton & Company, 2006), pp. 431-32. Jeremy J. Smith, *Essentials of Early English* (London: Routledge Taylor & Francis Group, 1999). Manfred Görlach, *Introduction to Early Modern English* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991). Dennis Freeborn, *From Old English to Standard English: A Course Book in Language Various across Time*, 3rd edn (New York: Palgrave Macmillan, 2006).

- 11 “leid”の使用例は3例ある。このうち、第63連480行の脚韻部(次行末の“yeid”と押韻)に現れる“leid”は、シン版でも書きかえられることなく“lede”(“yede”と押韻)の綴りで用いられている。脚韻を優先する姿勢は、文法上の編集ぶりと同じである。
- 12 MED, s.v. *can*: A peculiar variant of *gan*, past tense of *ginnen*; chiefly in N & NM.
- 13 本文全体に“can”は15回現れるが、そのうち601行目の例は‘know’の意味で使用されている。他の14回はすべて助動詞の用法(=‘did’)である。
- 14 OED3, s.v. *culd*: Erroneous forms *couth*, *coud*, *could*: = “did”.
- 15 Fox は ‘together’ と解している (*The Poems*, p. 379)。Cf. OED3, s.v. *atone* 5 (a) ‘at one’. 結果として、ヘンリソンの「意識が戻ると、深く悲しいため息をつき／悲しげな声と凍るような悲嘆の声をあげる。／「今、私の胸は激しい痛みに襲われ／悲しみに覆いつくされた、希望のない哀れな女」が、シンでは「意識が戻ると、深く悲しいため息をつき／悲しげで同時に凍るような声をあげる。「今、私の胸は激しい痛みに襲われ／悲しみに覆いつくされ、住む家もない哀れな女」となる。
- 16 MED, s.v. *feinen* 1 (a): To make (something), create, cause, bring about.
- 17 Skeat’s facsimile edition of the 1532 Thynne, Introduction, p. xxxi.
- 18 H. 59: 414 the earth] Th. 59 the great, H. 67: 480 leif] Th. 67 lerne, H. 79: 562 quhome] Th. 79 whan.
- 19 H. 61: 433-37] Th. *om*, H. 63: 444, 446, and 447] Th. *om*. 後述の「6. 変更されるクレシダの言葉」を参照。
- 20 Walter W. Skeat, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 7 vols (Oxford: Clarendon, 1894) . Vol. 7, Introduction, p. lv.
- 21 野島秀勝『ロマンス・悲劇・道化の死—近代文学の虚実—』(東京、南雲堂、1971年)、ジョージ・サンプソン『ケンブリッジ版イギリス文学史I』R. C. チャーチル補筆、平井正穂監訳(東京、研究社、1976年)を参照。
- 22 御興員三によれば、自分の非をたなにあげて神を呪い、罰を受けるという考えはスコットランド人特有の民族的特徴であるという。(「スコットランド詩人」福原鱗太郎、西川正身監修『英米文学史講座第一巻中世』(東京、研究社、1962年)、p. 197)。
- 23 “Criseyde loveth the sone of Tideus, / And Troilus moot wepe in cares colde. / Swich is this world, whoso it kan byholde;” Barney, ed. *Geoffrey Chaucer Troilus and Criseyde*. 日本語訳は『トロイルス』岡三郎訳・解説(東京、国文社、2005年)を参照。
- 24 チョーサー写本では‘Criseyde’と表記される場合が多いが、シン版ではチョーサーとヘンリソンの両作品に‘Creseyde’の綴りを用いて、一貫性を付与している。
- 25 上記の注2を参照。
- 26 “Ye may hire gilt in other bokes se; / And gladlier I wol write, yif yow leste, / Penelopeës trouthe and good Alceste” Barney, ed. *Geoffrey Chaucer Troilus and Criseyde*. 日本語訳は、岡訳を参照。
- 27 “Thus endeth the fyfth and laste booke of / Troylus: and here foloweth the py- / teful and dolorous testament / of fayre Creseyde.” (sig. Qq3)
- 28 クレシダは、死を前にして3度「ああ、不実なクレシド、誠実な騎士トロイラス」(O

- fals Cresseid and trew knicht Troylus!) をくり返し、後悔の情を示す (H. 546, 553, 560)。
- 29 C. David Benson, 'Critic and Poet: What Lydgate and Henryson Did to Chaucer's Troilus and Criseyde.' *Modern Language Quarterly* 53 (1992), 23-40 (pp. 24-25).
- 30 本稿に付した写真 (シン版 sig. Qq5^v) を参照。第62連は 5 行、第63連は 6 行、第64連と第65連は 8 行でかつ詩行の配列替えを伴う。
- 31 "Thy greit triumphand fame and hie honour,/ Quhair thou was callit of eirdlye wichtis flour,/ All is decayit, thy weird is welterit so;/ Thy hie estait is turnit in darknes dour; / [...]"
- 32 "My cleir voice and courtlie carroling,/ Quhair I was wont with ladyis for to sing,/ Is rawk as ruik, full hiddeous, hoir and hace;/ My plesand port, all utheris precelling,/ Of lustines I was hald maist conding/ [...]"
- 33 "O ladyis fair of Troy and Grece, attend/ My miserie, quhilk nane may comprehend,/ My frivoll fortoun, my infelicitie,/ My greit mischief, quhilk na man can amend/ [...]"
- 34 物語詩の記述については、山根正弘「シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』試論：恋愛の話を中心にして」、『英米文化24巻』英米文化学会、1994年、pp. 25-39を参照。
- 35 Wynkyn de Worde's 1517 edition of *Troilus and Cresyde*, sig. z8^v.

References

- Andrew Anderson. 1663. *The Testament of Cresseid*.
- Barney, Stephen. A., ed. 2006. *Troilus and Criseyde, Facing page Filostrato: context, criticism*. London: W. W. Norton and Company.
- Benson, C. David. 1992. "Critic and poet: what Lydgate and Henryson did to Chaucer's Troilus and Criseyde." *Modern Language Quarterly* 53: 23-40.
- De Worde, Wynkyn. ed., 1517. *Troilus and Cresyde*. STC 5095.
- Fox, Denton, ed. 1981. *The Poems of Robert Henryson*. Oxford: Clarendon Press.
- Freeborn, Dennis. 2006. *From Old English to Standard English: A Course Book in Language Variation across Time*, 3rd edn. New Yourk: Palgrave Macmillan.
- Görlach, Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Henrie Charteris. 1593. *The Testament of Cresseid*. STC 13165.
- MacQueen, John. 1967. *Robert Henryson: A Study of the Major Narrative Poems*. Oxford: Clarendon Press.
- Ruggiers, Paul. 1984. *Editing Chaucer: The Great Tradition*. Norman: Pilgrim Books.
- Skeat, Walter W. ed., 1905. *The Works of Geoffrey Chaucer and Others ... from the Copy in the British Museum*, London: Alexander Moring and Oxford University Press.
- Smith, Jeremy J. 1999. *Essentials of Early English*. London: Routledge Taylor & Francis Group.
- Thynne, William ed., 1532. *The Workes of Geffray Chaucer newly printed, with dyuers workes whiche were neuer in print before ...* London: Thomas Godfray, STC 5068.

Urry, John ed., 1721. *The Works of Geoffrey Chaucer*. London: Bernard Lintot.

サンプソン、ジョージ、R. C.チャーチル補筆、平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅰ』東京、研究社、1976年。

志子田光雄『英詩理解の基礎知識』東京、金星堂、1980年。

高宮利行、松田隆美編『中世イギリス文学入門—研究と文献案内—』東京、雄松堂、2008。

チョーサー、ジェフリー、岡三郎訳・解説『トロイルス』東京、国文社、2005年。

野島秀勝『ロマンス・悲劇・道化の死—近代文学の虚実—』東京、南雲堂、1971年。

御興員三「スコットランド詩人」、福原鱗太郎、西川正身監修『英米文学史講座第一巻中世』東京、研究社、1962年。188-206。

山根正弘「シェイクスピアの『トロイルスとクレシダ』試論：恋愛の話を中心にして」、『英米文化24巻』、英米文化学会、1994年。pp. 25-39。

The testament of Ercelyde.

Soe thewe her tuel a some had no knowlege
Of her; because she was so deformat
With byles blaue ouersped in her visage
And her fayre colour faerd and alterate
yet thep refused for her tpe regrade
And styt mourning she was of noble thyme
With better wyl thep thep toke her tme

The day passed; and Phobus went to rest
The coudes blaue ouershed of the tpe
God wote if Ercelyde were a fowful geft
Doyng that vncouth face and herboye
Dyd mrate or drake she duffed her to tpe
In a derke corner of the housealone
And on this wyse wepyng she made her moue

¶ Here foloweth the complaint
of Ercelyde.

O Shoppe of sorowen fowlen in to care
O carstle Ercelyde now a euemare
Cone in thy tope and al thy myght in rethe
As al bythynesse now arte thou wale a dore
I her is no salve maye helpe thy fare
I her is no fortune; waled so thy warte
Thep byles in banysched and thy bale vnderd
Under the great god if I grauen ware
Whe men of Grece ne yet of Troy myt herd

Where is thy chambrer wantonly be fene
With thy busy bedde and banckes drowded bene
Bypres and wyne to thy colatoun
The cuppes al of golde and plure shene
The swete meates serued in plates cleue
With fauery sauer of a good fauoun
Thep gay garmetes with many goodly gown
Thep pleisant faune pynned w' golden penne
Al to accre thy great royal renoun

Where is thy garderyn with thy grece gap
And freshe floures; whiche the quene I foray
Had paynted pleisantly in every pane
Where thou were woutte ful meryly in May
To walke; and take the dewe be it was day
And here the merke and mayple many one
With ladies fayre in carollyng to gone
And se the royal renke in their ray

¶ This tpep toge take for thy goodly boue
And for thy bedde; take now a bonch of stow
For wayled wyne and meates thou had tho
Take mouted brede; pirate; and spore four
But cuppe and clapper now be at ago

Wher cleue doice and my courtly carollyng
No ranke as robe; ful shouus her and hare
Deuoured in the figure of my face
No loken on it no pleple hath tpeyng
Soiped in fyght; I say with fowt liggyng
Lpyng among the tpep solke alae.

O ladies fayre of Troy and Grece attende
Wher steple fortune; myne infelgate
Wher great myschefe whiche no man can amede
And in your mynde a myroure make of me
As I am now paraunture that pe
For al your myght may cde to the same ende
Wels wofe if any wofe may be
Deware therfore appocheh nere your ende

Nought is your fairnesse but a fadyng floure
Nought is your fauour a saude a tpe honore
But wynde in flate in other meines cares
Your rofynge need to rotynge shal retoure
Example make of me in your memoie
Whiche of such thiges; woful wyntesse beares
Al welth in erthe; as wynde away it beares
Deware therfore appocheh nere your houre

¶ Thus chydng with her dery defenyng
Wepyng; she wote the nyght fro ende to ende
Wut al in bayne her dole; her careful cry
Wyght nat remedy; ne yet her mourning mede
A tpep lapp toke and to her wende
And sayd; why spurnes thou agayne the wal
As seest thy selfe; and minde nothyng at al

Withe that thy wepyng but doubtles thy wo
I counsaile the make vertue of a nebe
So lerne to clappe thy clapper to and fro
And lerne after the lawe of sepepe lede
Thep was no bote but soith with thā the pebe
Fro place to place; while rode a hunger fore
Compelled her to be a ranke beggare

¶ That

←
62連

W. Thynne's 1532 edition of the *Workes of Geffray Chaucer*, sig. Qq5'. (第62連は5行、第63連は6行、第64連と第65連は8行となり、かつ詩行の配列替えがおこなわれている。)